

Monthly Journal of the Japan-India Association

公益財団法人 日 印 協 会 (日印間の政治・経済・文化交流に貢献して 109 年)



<雪の『タージ・マハル』ステージにて挨拶されるカント・サハイ観光大臣(右)>  
 2012年2月6日 第63回 さっぽろ雪まつり開会式  
 写真提供 鎌野代志美さん(日印協会個人会員)

目次

1. 梅田邦夫 外務省南部アジア部長 講演会 .....	P. 3
2. インド国防幕僚大学の思いで .....	P. 5
3. インドニュース(2012年1月).....	P. 9
4. イベント紹介 .....	P.13
5. 新刊書紹介 .....	P.18
6. 掲示板 .....	P.19



# 1. 梅田邦夫 外務省南部アジア部長 講演会

## Results of P.M.NODA's Visit to India

去る1月19日、日印協会主催により「野田総理大臣のインド訪問と日印国交樹立60周年の課題」と題する講演会を、東京商工会議所国際会議場で開催しました。

昨年12月末の野田総理の訪問を準備、同行された梅田部長の講演ということで、法人・個人会員を中心に100名を超える方々が参加されました。タイムリーに講演会の開催ができたこと、また質疑応答の時間を設けたこともあり、多くの参加者に喜んでいただきました。

梅田部長は総理訪問の成果として、

- (1) 首脳会談で、両国関係の強化に対する双方の意思(Will)が非常に明確になったこと
- (2) 会談での議論は、総論から実行面の具体論に入ってきたこと
- (3) 経済関係の閣僚対話の早期実現が合意されたこと

を挙げられました。

また野田総理訪印の直後に、枝野経済産業大臣が日本企業が多く進出しているチェンナイを訪問し、日本側のインドの経済発展に対する協力・支援の強い意思を示したことも紹介されました。

ご参考までに当日会場で配布された資料の一部をご紹介します。



< 講演される梅田部長  
講演風景 >



### 野田総理のインド訪問(2011年12月27日～29日)

1

国賓としての訪問。2005年以降毎年首脳が交互に訪問。今回の訪問を通じ、両首脳間の信頼関係が更に強固に。

#### 二国間関係全般

- 野田総理から、東日本大震災に際してのインドからの多大な支援に感謝の意を表明。シン首相から、日本の一日も早い復興に対する期待を表明。
- 2012年に日インドで国交樹立60周年を迎える機会に国民レベルの相互理解を深めるために文化行事や人的交流を強化することで一致。

#### 政治・安全保障

- 年次首脳会談の継続の重要性を確認。シン首相に2012年の訪日を招請。
- 外相間戦略対話・防衛大臣間の会談が行われたことを評価。閣僚級経済対話の早期実施を期待。日米印協議の立ち上げを歓迎。
- 航行の安全及び自由を含む海上安全保障分野での協力拡大を確認。2012年の海上自衛隊とインド海軍での二国間訓練実施の合意を歓迎。

#### 経済(その1)

- 日インド包括的経済連携協定の発効や社会保障協定交渉の開始を歓迎。社会保障協定交渉の早期妥結を指示。
- デリー高速輸送システムを含む計2件、総額約17億ドル(約1,343億円)の円借款供与を決定。シン首相は謝意。
- デリー・ムンバイ間産業大動脈構想(DMIC)
  - ・ 両首脳は、90億ドルのDMICファシリティの立ち上げを歓迎。
  - ・ 日本は今後5年間で45億ドル規模の資金面での協力の意図を表明。
  - ・ インド側は、DMIC開発公社への資本参加や役員・専門家の派遣を通じた日本の積極的な関与を歓迎。
  - ・ インド側は、日本のファシリティの有効活用や日本企業の投資促進のため、金融面での規制緩和に関し、①既存の資本規制の枠組みの中での問題解決、及び②省庁間の協議メカニズムの設置を決定。
  - ・ DMICの電力事業への十分なガスを提供。
  - ・ 成功モデル3案件(グジャラート州ダヘジ地区海水淡水化事業、ラージャスタン州ニムラナ工業団地太陽光発電事業、マハラーシュトラ州ガス焚IPP発電事業)の早期実現に合意。

(写真提供:内閣広報室)



## 野田総理のインド訪問(2011年12月27日～29日)



2

### 経済(その2)

- インド南部におけるインフラ整備
  - ・エンノール港、チェンナイ港及び近隣地域における港湾や工業団地等のインフラ向上のための努力を強化することを決定。
  - ・日本側は、チェンナイ・バンガロール間の連結性向上のためのマスタープラン作成に対する支援を表明。
- 日本側より、高速鉄道システム開発において日本の技術及び専門性が活用されることへの希望を表明。  
シン首相は日本の関心を歓迎。
- 日インド間の通貨スワップ取決めに関し、従来の30億ドルから150億ドルに拡充することで合意。
- レアアースについて、日本及びインドの企業間の共同事業の実施に向け協議を継続することで一致。

### 原子力協力

- シン首相から、日本のセンシティブティはよく理解している旨述べ、両首脳間で、双方にとって満足のいく合意が得られるよう、協定交渉を進展させていくことで一致。

### 教育・人の交流

- キャンパス整備を含むインド工科大学ハイデラバード校に対する協力拡大、日本の支援によるインド情報技術大学ジャバルプル校設立の着実な進捗、製造業経営幹部育成支援プログラムの進展を歓迎。
- ナーランダ大学に関し、日本からの学術交流や人材育成等具体的な貢献の意図を表明。インド側は歓迎。

### 地域情勢・地球規模課題

- 北朝鮮に関し、野田総理から、北朝鮮情勢の安定が非常に重要であるとして拉致問題を含め、インド政府の理解と協力を要請し、シン首相からは、日本と緊密に協力していきたい旨発言。
- アジアの地域情勢や、世界経済、気候変動、軍縮・不拡散、国連安保理改革等の地球規模課題についても意見交換を行い、両国で協力していくことを確認。

インドにおける日本インド国交樹立 60 周年記念行事は、2011 年 12 月から始まっていますが、本誌では本年 2 月以降の行事を、講演会の資料から抜粋してご紹介致します。

2012年2月(日程調整中)	「増村保造」監督特集映画上映(デリー)
2012年2月3日-4日	タゴールと日本の詩(デリー)
2012年2月10日-11日	Erabration2012(クイズ・コンテスト)(デリー)
2012年2月19日	Japan Habba(日本祭り)2012(バンガロール)
2012年2月17日-19日	絆フェスティバル(予定)(デリー)
2012年2月18日-20日	壁画アート・フェスティバル2012(ブダガヤ)
2012年2月24日,27日-3月4日	壁画アート・フェスティバル2012デリー報告会(デリー)
2012年2月20日-25日	第5回マザーガンガー油彩画平岡達子展(デリー)
2012年2月21日-28日	アニメーション制作に関するワークショップ (ムンバイ(2月21日～23日),デリー(26日～28日))
2012年2月23日	日印詩の朗読会(デリー)
2012年2月25日	第24回全インド日本語弁論大会(デリー)
2012年2月25日-3月4日	ニューデリー国際外国図書展(デリー)
2012年2月27日	東京大学インド事務所開所式典(バンガロール)
2012年3月1日	生け花デモンストレーション及びワークショップ(デリー)
2012年3月1日-5日	日印若手社会起業家シンポジウム(デリー)
2012年3月3日-4日	日印文学会議(デリー)
2012年3月3日-11日	日本の産品展示会
2012年3月6日-8日	日本女性映画監督特集上映(デリー)
2012年3月13日-20日	日印交流の歴史写真展・パネル ディスカッション(デリー)
2012年3月14日-20日	池上嘉彦教授言語学セミナー (デリー,バンガロール)
2012年3月15日-20日	日印ダイアログ(デリー)
2012年3月24日-26日	江戸木目込人形展(デリー)
2012年3月30日	日本食・日本酒文化紹介(デリー)
2012年3月(日程調整中)	KANTARO!! コンテンポラリーダンス公演(日印舞台芸術ワークショップ)(デリー)
2012年3月(日程調整中)	「Light Up Nippon」(映画上映及びシンポジウム)
2012年7月27日	世界平和と核のない世界に関する絵画コンテスト(デリー)
2012年8月11日-9月9日	アジア芸術家交流展2012(コルカタ)
2012年11月(日程調整中)	日本武道館派遣武道代表団(デリー)

今回の訪問については『月刊インド』1月号で「野田総理のインド訪問について」と題し平林理事長の記事もありますので、ご参照下さい。

## 2. インド国防幕僚大学の思いで Recollections of DSSC

日印ビジネス支援協会株式会社  
代表取締役 平野隆之(日印協会個人会員)

### ① はじめに

インド軍には、Defence Services Staff College (DSSC; インド国防幕僚大学)という軍の大学があり、選抜試験に合格した陸・海・空軍の大尉から中佐クラスの中堅将校が入学する。コースの期間は約1年であり、私は2等陸佐(旧軍の陸軍中佐に相当)になりたての1992年5月、命によりこの大学に入学した。私が今までお付き合いしたインド人で、この大学の存在を知らないものは一人もいない。現在お付き合いしている軍とは全く関係のないビジネスマンでも、この大学の存在は知っており、初めて会った時に、DSSCの出身だと言っただけで一気に打ち解けて話が盛り上がり、そのままインド料理店まで行って、一緒に食事をしてしまったぐらいである。我が国の陸上自衛隊でこの大学に相当するのが指揮幕僚課程(CGS: Command and General Staff Course)であり、旧軍の陸軍大学に相当し、これも選抜試験に合格した者が入学できるが、日本人でCGSのことを知っている人は少ない。親族に自衛隊関係者がいるか防衛産業の人たちぐらいではなからうか。これが、軍(自衛隊)に対するインド人と日本人の大きな差かもしれない。

### ② DSSC, ウェリントン

DSSCは、インドのタミル・ナドゥ州のデカン高原南端部ニルギリ高原にあり、所在地の地名はウェリントン、ニュージーランドのウェリントンと同じ地名である。標高1,880メートルの高台にあるため気候に恵まれ、年間を通じて冷暖房器具はほとんど必要ない。もともとDSSCは、1905年にボンベイ(現ムンバイ)近郊のデヴラリというところに開設されたが、1907年には現パキスタン領であるクウェッタに移転し、独立に伴い1947年に現在のウェリントンに移された。開設当初は陸軍将校のみを対象としたものであり、学生総数は50名であったが、1949年に海軍が、1950年には空軍が加わり、現在では文官、留学生を含み、学生総数400名に達する3軍統合の教育機関である。

ウェリントンの町は小さく、何の娯楽施設もないが、風光は明媚であり修学には大変適した環境と言える。留学当時最も困ったことは電話が無かったことであり、父が倒れたという知らせが届いたのは、倒れてから2日後であった。現在は携帯電話が普及しているので、このようなことはないだろうが、当時は電話を設置するのに半年待たなければならなかった。日本からの留学生は3年に1度しか来ないので、他国の留学生のように、前任者から電話を引き継ぐということができないのである。どうしても電話しなければならないときは、近所の英国人留学生の家からかけさせてもらったり、町まで行きテレフォンプースでかけたりと、かなり不便であった。また、私の方針で、テレビなんぞは修学の邪魔になると思い敢えて買わなかったが、当時インドでは、日本のテレビドラマ『おしん』が大ヒットしており、インド人学生の大半が見ていた。これを気の毒に思ったサーバントが、『おしん』の放映時間になると我が子供達を誘い、白黒の小さなテレビで見せてくれた。

### ③ 学業

DSSCの教育目的は、「3軍の将校を教育し、3軍相互の協力と問題点の理解を促進する」となっており、最も学生数の多い陸軍学生に対する教育目的は、「陸軍将校に対し、上級軍事教育及び広範囲の一般的教育を施し、師団あるいは旅団の中堅幕僚として職務遂行できるレベルに高める」となっている。このため、教育の範囲は広く、戦略・戦術のみならず国際関係や国家安全保障といった課目もあり、この一環として留学生のいる国の大使は講師として招待され、全学生並びに教官に対して講演される。私が留学している時には、小林俊二大使が来校され講演された。後の1994年10月から1998年7月までのデリー勤務時代のボスである谷野作太郎大使と平林博大使も講演された。留学生としては、自国の大使が遠路はるばるお越しになり、講演していただくことは大変嬉しく、誇らし

いものである。それに加え、家庭以外で日本語が使える稀少な機会でもある。大使が来られた時は、留学生も学校長主催のディナーに大使とともに招待されるので、学校のお偉方と親しく会話できるのもありがたい。留学生にとっては良いことづくめであり、当日は鼻高々であったことが思い出される。

本大学のもう一つの特色は、一定以上の成績を収めれば、マドラス大学の修士号(Degree of Master of Science in Defence Studies)が付与されることである。DSSC では、卒業前に英文で約 8 千字の論文の提出が求められるが、これが実質的な修士論文となる。マドラス大学に論文を提出し、認められれば博士号が付与される。なお、論文に限らず、教育は全て英語で実施され、討議の時間にはインドなまりの英語が飛び交う。そこに日本なまりの英語が混じり、はたまたアメリカ、イギリス、オーストラリア、アジアやアフリカの留学生の英語が混じり、発音はともかく、表現まで微妙に違ったりして実に面白い。本留学中に痛烈に感じたことは、英語は日本で主流になっているアメリカンイングリッシュだけではなく、国ごとに色々なバリエーションがあり、それが意思疎通の手段としてしっかり機能していることである。国際社会で活動するためには、やはり英語のブラッシュアップは不可欠なのだ。

### ④ 列車借り切り研修旅行



<寝台列車(左)と軍楽隊の歓迎演奏(右)>

DSSC では、教育の一環として前方地域研修旅行というものが 10 日以上かけて行われる。国境付近の部隊や中印国境を視察する長旅であり、

留学生も参加するが、なんと列車を借り切

って移動するのである。つまり、その列車には DSSC の学生と学校の職員しか乗らないという DSSC 専用列車である。さらに到着する駅では軍楽隊が歓迎演奏までするのである。これには恐れ入った。将来の国防を担うエリート将校の集団であることは間違いないが、それにしても列車借り切りに軍楽隊の歓迎演奏とは。インドにおける軍の凄さを垣間見たような気がした。また、シッキムで中印国境を視察したことも印象深く、中国の警備兵がはっきり見えるところで国境を視察する。国境の間には地雷原があり、無言の緊張感に包まれていた。中国の警備兵に向かって手を振ってみたが無視された。

### ④ クラブ活動



<競技会に参加する家内  
夫は技量未熟につき参加できず(涙)>

課外活動(クラブ活動)も盛んであり、私と家内は乗馬クラブに入部した。夫人同伴は強制ではないが、皆、家族を帯同して来る。それが当たり前なのだ。このため、大学のクラブにも夫人が参加できる。これも日本の CGS とは大きな違いであろう。チャレンジ精神旺盛な家内は、日本ではなかなかできないことをしたいと乗馬クラブに入部した。私もつられて入部した。練習は朝の 6 時から。従って、相当早起きしなければならない。宿題を理由に時々サボる私とは違い、家内は皆勤賞。上達も必然的に家内の方が早く、競技会にまで参加してしまった。主人として立つ瀬がないが、仕方が無い。この乗馬は、いわゆる貴族乗馬というべきもので、ただ行って乗れば良い。馬の手入れとか厩舎の掃除などは一切しない。それをする人がちゃんといるので、する必要が無いし、そもそも軍の将校たるものそういうことはしないのだそう。実に快適な乗馬クラブであった。帰国して

からも続けようと数箇所の乗馬学校を見学してみたが、馬の手入れから厩舎の掃除まで全てやらなければならないため、かなり横着になっていた私達には適さないと考え諦めた。これは、その後勤務したデリーでも同じであり、娘が乗馬学校に通ったが、やはり貴族乗馬であった。娘も帰国してからは、2~3度乗馬クラブに行ってみたものの、結局入部までには至らなかった。馬の手入れや厩舎の掃除が面倒くさいのである。乗馬をするならインドに限る。これが我が家の結論である。

## 生活

気候に恵まれていることと、ウェリントンの町自体が DSSC のためにあるようなものなので、生活は快適であった。ほとんどのインドの町同様、停電と断水はつきものだが、慣れればどうということはない。ロウソクで夜を過ごすのもおつなものである。ただし、食べ物の好き嫌いの多い人には苦痛かもしれない。和食レストランなどなく、そもそも我々以外に日本人がいなかった。インド人と結婚されたかよこさんという方が近くのクヌールという町にご自宅を持っていらっしゃるが、ご主人のお仕事の関係でシンガポールにお住まいだったので、年に1~2度帰って来られる程度だった。ただ、帰って来られた時には必ず声を掛けて下さった。かよこさんは面倒見の良い親分肌の方で、留学生は代々お世話になっている。私も随分お世話になった。このような邦人こそ叙勲の対象にしていきたいと願うばかりである。

食べ物の話に戻ると、好き嫌いがなく、果物が好きな者には快適である。特に果物は豊富で、マンゴーやパイヤは安くて美味しいし、ジャックフルーツというのものもあるしスイカもある。肉類はチキンが美味しい。これはマーケットで柵の中を走り回っているニワトリの一番太って美味そうなのを指差すと、その場でしめてくれる。肉は固めだが、日本の地鶏と同じで味にコクがある。インド陸軍には、いかなる部隊にもオフィサーズメスという将校クラブが存在し、DSSC にも立派なオフィサーズメスがあり、ここのタンドリーチキンとチキンカレーは実に美味であった。思い出すと涎が出てくる。

## ドラム缶風呂

官舎には風呂がない。シャワーのみ。風呂大好き人間の私には、少々堪えたが仕方ない。そもそも風呂オケに並々と湯をためるほどの水もないのだ。シャワーも、水をためてお湯にするギザというものがあるが、その中にある湯を使いきってしまえば、暫くは湯が出ない。一番困ったのは子供達だ。シャワーでキャッキョはしゃいでいるとすぐ水になってしまい、満足に身体が洗えない。そこで考えたのがドラム缶風呂だ。サーバントがどこかからドラム缶を持って来て、これを三分の一ぐらいに切って即席風呂オケを作った。これがインド人の凄いとこで、紙にドラム缶風呂のイメージを書いたら、そのとおり作ってしまう。ドラム缶の切り口は、子供達が怪我をしないように、きれいに丸く削ってあった。内側は厚めに塗料が塗ってあり、これに水を入れ、その中に電熱コイルのお化けのようなものを入れて温めるのだ。この即席風呂に浸かって幸せそうにしている子供達を見て、思わず自分も入りたいと思ったが、グッとこらえてあきらめた。私が入るほどの湯はない。

## カースト

インドで最も民主的な組織は、たぶん軍ではないかと思う。軍には、カーストによる差別は原則として存在しない。生死をかける戦場では、カースト云々などと言ってられない。それよりもっと歴然とした差があり、それが階級である。階級があるからこそ、軍の組織としての統一性が保たれているのであり、それがカーストでひっくり返るようなことになると軍は機能しない。がしかし、一步軍という枠から離れると、そこにはやはり上下の差というものが存在する。例えば、主人とサーバント。

私たち家族が入居した宿舎は、ゴルカヒルという高台にあり、DSSC から3km程度離れている。我がサーバントは、メリーと、その夫のフランシス。フランシスとメリーには2人の子供がおり、長男のサジュと長女のフェルシーだ。年齢は、ちょうど我が家の子供達と同じだ。我が子供達は、ヘブロンスクールという英国系の学校に通い英国及び米国の留学生とタクシーをシェアして送り迎えしていたが、サジュは毎朝3km近く離れた学校まで歩いて通わなければならなかった。その学校が、ちょうどDSSCに行く途中にあったので、私が送ってあげることにした。毎朝、サーバントの子供を私が運転す

る車で送ってあげた訳である。暫くしてからインド人の学生に聞かれた。「いつも子供を車に乗せてくるが、あれは誰だ。親族か」「いや、メリーの子だよ」「メリーって誰だ」「我が家のメイドさんだ」「・・・」尋ねてきたインド人は、たいてい何も言わなくなる。英国人や米国人の留学生も、信じられないというまなざしで見ている。しばらくしてから、彼らの世界には、歴然とした階級、あるいはレベルの差というものが存在していることに気がついた。サーバントとは一線を画すというような暗黙の了解があったように思う。つまり、地位の高いものは、その地位に相応しい相手と付き合い、サーバントなどと一緒に食事することなどあり得ないのだ。ましてや、サーバントの子供をご主人様自ら運転する車に乗せ、学校まで送ってやるなどということは、狂気の沙汰に見えたのだろう。私は、



<十数年ぶりの再会

左からフランシス、メリー、フェルシー>

「同じ方向に行くのだし、乗せてってやればアップダウンの多い山道を3kmも歩かないで済むじゃないか」と思っただけであり、サーバントの子供だろうがなんだろうが、「関係ねえ」であった。もちろんサーバントの子供を送ってはいけないという規則も無く、そのうち誰も何も言わなくなった。このフランスとメリーは、後のデリー勤務時にも私と家族のために働いてくれた。インドでの勤務が終わり、10年振りに訪印したときも、花束を持って出迎えてくれ歓迎パーティーまでやってくれた。現在行っている仕事の関係で訪印したときは、何かと手伝ってくれ、また助けてもくれる。ありがたい。

## ④ 結び

つらつらと駄文を連ねたが、DSSCでの生活は正に驚きと感動の連続であり、生涯忘れることはないだろう。世の中にこのような世界もあるのだと知っただけでも大収穫と思っているし、できることならまたウェリントンに住んでみたいと思う。東京という大都会で、人と接触するのを避けながら歩き、信号の変化に追い立てられ、点滅したら思わず走り出してしまうという生活に疲れた方がいらっやったら、第一にお勧めできるのがウェリントンであると思っている。

## <筆者紹介>

昭和 28 年 5 月 東京都墨田区生まれ  
 昭和 51 年 防衛大学卒、陸上自衛隊入隊  
 以後、主として航空操縦士(ヘリコプターパイロット)として勤務  
 昭和 60 年 陸上自衛隊幹部学校(CGS)入校  
 平成 4 年 インド国防幕僚大学入学(マドラス大学修士)  
 平成 6 年 外務省出向、在インド日本国大使館 参事官兼防衛駐在官  
 平成 10 年 帰国後、防衛庁情報本部勤務を経て4つの指揮官職を歴任  
 平成 21 年 4 月 退官(陸将補)  
 平成 22 年 7 月 E ヤク(軍事英語翻訳)創業(その後Eヤク行政書士事務所に改名)  
 平成 23 年 10 月 日印ビジネス支援協会株式会社設立、同代表取締役役に就任



### 3. インドニュース(2012年1月) News from India

#### . 内政

1月11日

- ジャールカンド州サーヒブガンジ県で急行列車が停車中の貨物列車に衝突し5名が死亡、15人負傷。急行列車の運転手の信号の見落としが原因とみられる。

1月15日

- 英字各紙は、14日にチェンナイで開催されたタミル語週刊誌の42周年記念行事にモディ・グジャラート州首相及びアドヴァニBJP(インド人民党リーダーが出席し、UPA(統一進歩連盟)現政権の腐敗を非難するとともに、中央政府が州政府を地方都市のように扱い州政府を管理下におこうとしており連邦制を阻害していると述べた旨報道。

1月19日

- 英字各紙は、18日にジャヤラリタ・タミルナードゥ州首相が工業大臣、商業税大臣、学校教育・青少年福祉・タミル文化大臣、歳入大臣の4閣僚を交替させた旨報道。今回の内閣改造はAIADMK政権発足後5回目。

1月22日

- 英字各紙は、21日にジャールカンド州西部のガルワ県内のジャングルで行政区長の先導警戒にしていた警察官15人がマオイスト約40人の襲撃を受け、うち13人が殺害された旨報道。

メモ:

同報道では、昨年11月の治安部隊によるキシャンジ殺害に対する報復と思われる、ジャールカンド州ではキシャンジの殺害以降マオイスト活動が徐々に活発となってきている由。

1月24日

- 英字各紙は、23日にマハーラーシュトラ州警察が昨年7月13日のムンバイ市内で発生した連続爆弾テロ事件をほう助した容疑で3名を逮捕するとともに、現在捜索中の事件の首謀者であるインディアン・ムジャヒディン共同創始者の氏名・写真を公表した旨報道。

1月27日

- 英字各紙は、26日にジャヤラリタ・タミルナードゥ州首相が、6回目となる内閣改造を行い、ヴェルマニ歳入大臣とクリシュナムールティ学校教育・青少年福祉・文化大臣を更迭した旨報道。

メモ:

ヴェルマニ大臣とクリシュナムールティ大臣はともに先般追放された盟友サシカラ女史及びその一族に近いとみられたことから1月18日にそれぞれ現職に交替させられたばかり。報道によれば、ジャヤラリタ州首相は18日の内閣改造時に、サシカラ女史及びその一族と連絡を取り続ける場合には何らかの措置を講ずる旨述べていたが、今回更迭された両大臣はこの警告を無視していた由。ヴェルマニ歳入大臣の後任にはセンゴタイヤンIT大臣が、クリシュナムールティ学校教育・青少年福祉・文化大臣の後任にはスブラマニアン党チェンヤール地区代表がそれぞれ就任。

#### . 経済

1月1日

- インド財務省は、適格海外投資家がインド株式市場への直接投資を許可する決定を行った旨発表。

メモ:

現在の外国からのポートフォリオ投資では、外国投資機関のサブアカウント及び非居住インド人のみがインドの株式市場に直接投資できることとなっているが、今回の措置により多様な各国の個人投資家がインド株式市場へ直接投資できることとなる。なお、適格海外投資家は資金洗浄に関する金融活動部会を遵守しており、証券監督者国際機構の多国間MOUの締結国であるところの外国の個人、団体、協会を含み、外国投資機関のサブアカウントは含まない。

1月4日

- エコノミック・タイムズ紙は、通信 IT 省電気通信総局が、セキュリティチェックの範囲を携帯電話事業者が使用するソフトウェアを含むように拡大するとともに、電気通信事業者はソフトウェアをアップデートしてから 15 日以内にその旨を報告することと、10 年間その情報を保持することが義務づけられる旨報道。

1月5日

- インド商工省は、2011 年 12 月 24 日に終了する週の食料インフレ率が 6 年振りのマイナスとなる - 3.36%となった旨発表。
- エコノミック・タイムズ紙は、ブラックベリーや G メール、ノキアのプッシュメール、スカイプなどの暗号通信をインドの安全保障機関が傍受できなかったことを受け、通信 IT 省電気通信総局はこれらの通信を解読可能にするための技術面、規制面の双方について、米国の機関に助言を求める旨報道。

1月10日

- インド商工省は、シングルブランドの小売業への海外直接投資(FDI)を出資率 100%まで認める旨の通達を发出。

メモ:

これまでインドでシングルブランドに認められていた FDI 出資率は 51%。世界的にはシングルブランド分野は 100% 外資が一般的であることから、世界の大手ブランドはインド進出に消極的であった。今回 100% 出資が可能となったことで、IKEA や GAP、プラダ等が進出に関心を有している由。ただし、51% を超える FDI を申請する場合、価格ベースで 30% 以上の販売品はインドの中小企業、村落の企業、芸術家、職人から購入することを義務づける等の条件がついている。

- 英字各紙は、9 日に西ベンガル州がバナジー州首相政権となっはじめての本格的な産業誘致のための産業見本市となる「ベンガル・リード-2012」が開催され、バナジー州首相らが出席した旨報道。

1月13日

- インディアン・エクスプレス紙は、12 日に、インドの安全保障に関する内閣委員会に対し、米国、EU によるイランへの厳しい制裁に際しイランからの原油供給を維持するための対応策(プラン B) が提示された旨報道。

メモ:

内閣委員会に提示された対応策では、「石油・プロジェクト交換」制度に基づくプロジェクトの輸出を含むインドの対イラン輸出を促進することを計画している他、インドの対イラン輸出に対するイラン支払い額を相殺する目的のみならず、イランが第三国から輸入を行うための資金を与える目的でイラン中央銀行が自行の保有するルピー口座をインド統一商業銀行との間で使用するための便宜を供与する考え。

1月14日

- テレグラフ紙は、13 日、西ベンガル州ハルディアにある三菱化学工場において、トリナムル・コングレス党系の労働組合が工場の操業を中止させ日本人 40 人を含む管理職員 120 人以上を取り囲んだ旨報道。

メモ:

報道によれば、騒動の発端は、10日に経営部門が組合との協議なしに空席の管理ポストに充当するため受験者1名をインタビューに呼んだことに反発したもので、13日に組合系従業員が工場の操業妨害に加わり、賃金見直しを要求して騒ぎを起こした。午後4時頃発生した騒擾は警察の説得により午後9時頃に終了した。

1月16日

- インド商工省は2011年12月の卸売物価指数の前年同月比上昇率(インフレ率)は7.47%となり、2011年11月の9.11%、また前年同時期の9.45%から大幅に低下した旨発表。

メモ:

インドのインフレ率は2011年11月までの1年間は毎月9%超で、今回の7.4%という数字は2年ぶりの低水準。農産物など1次産品価格の上昇率が3%にとどまっており全体のインフレ率を押し下げる結果となった。

- インド商工省は2011年4月～12月の貿易額(暫定値)を発表。輸出は前年同期比25.8%増の2,176億ドル、輸入は同30.4%増の3,509億ドルで、貿易赤字は1,333億ドルとなった。

メモ:

輸出が好調であった分野は機械類(453億ドル、前年同期比21.6%増)、石油製品(439億ドル、同55%増)、宝石・貴金属(335億ドル、同38.5%)。輸入については、石油製品が1,056億ドル(同40.4%増)、金銀が455億ドル(同53.8%増)、機械が258億ドル(同27.7%増)。

1月23日

- ビジネス・ライン紙は、グジャラート州選出のBJP所属国会議員がトリベディ鉄道大臣と会談し、アーメダバード～ムンバイ間的高速鉄道を含むグジャラート州における鉄道プロジェクト及びインフラ整備を要請した旨報道。
- ビジネス・スタンダード紙は、フォード・モーターのインド法人であるフォード・インディアがチェンナイ近郊の自社工場に75億ルピーの追加投資を計画している旨報道。

メモ:

米フォード社は1995年のジャヤラリタ政権時に外国大手自動車会社として初めてタミルナードゥ州に大型投資を行い、その後の各国の自動車会社による相次ぐ投資の先鞭をつけたもの。今回の追加投資は、新型モデルである「フォード・エコ・スポーツ」の生産を行うべく、チェンナイの南約45キロのマライマライ・ナガルにある自社工場に対し行うもの。

1月24日

- インド準備銀行は第3四半期金融政策レビューにおいて、政策金利の据え置き及び預金準備率の引き下げを発表するとともに、2011年度のインドのGDP成長率の予測を7.6%から7.0%へと下方修正。

- 英字各紙は、23日にヴァサン連邦海運大臣はジョシ連邦道路交通・高速道路大臣とともにエンノール・マナリ間道路整備事業(EMRIP)の進捗状況確認のためチェンナイを訪問し、EMRIPや2013年6月までには完成すると見込んでいた旨報道。

メモ:

EMRIPはエンノール港及びチェンナイ港周辺の道路混雑を解消させるためタミルナドゥ(TN)州政府により提唱された事業で2011年に着工式を実施したもの。ヴァサン海運大臣は、TN州での選挙の影響で作業スケジュールが遅れていたが、同事業に対する中央政府からの資金供与については中央政府として優先的に行う予定である旨発言

- ヒンドゥー紙は、ジャヤラリータ州首相がチェンナイ外環道路整備事業フェーズ2(チェンナイ北西約60キロのネミリチェリ~チェンナイ北西約27キロのミンジュール間約32キロ、投資額107億5千万ルピー)の作業開始を承認した旨報道。

## . 外交

1月5日

- タイムズ・オブ・インディア紙は、米務省ウェブサイトに掲載されたインドの地図の中でジャンムー・カシミール州が「甚だしく不正確に」記載されていることに対し、インド政府は強く異議を申し立てるとともに、米政府に対し本件を提起する旨述べた旨報道。

1月7日

- タイムズ・オブ・インディア紙は、インドが米国による対イラン制裁適用除外を求め今後米側に働きかけを行っていく旨報道。

1月17日

- 16日~19日にかけてクリシュナ外相がスリランカを訪問。南部鉄道線路や学校校舎・住居等の引き渡しを南部ゴールや北部キリノッチで実施。

## . 日印関係

1月4日

- インディアン・エクスプレス紙は、インドを訪問中の福田元総理がグジャラート州でモディ州首相と会談し、福田元首相は日本とグジャラート州との関係強化を主張した旨報道。

1月10日

- チェンナイを訪問中の枝野経済産業大臣はジャヤラリータ・タミルナドゥ州首相と会談。

1月12日

- 前田国土交通大臣がデリーを訪問し、トリベティ鉄道大臣やジョシ道路交通大臣、ヴァサン海運大臣と会談。

1月13日

- 日本の国土交通省はデリーで高速鉄道セミナーを開催。日本からは北村国土交通審議官、インド側はトリベティ鉄道大臣等が出席。

1月23日

- ヒンドゥー・ビジネス・ライン紙は、TOTOが約7,600万ドルを投資して、同社にとってインド初の生産工場をグジャラート州ハロール市に建設する旨報道。

1月25日

- タミルナドゥ州を訪問している大橋会長を団長とした日印経済合同委員会メンバーはジャヤラリータ州首相を訪問、ジャヤラリータ州首相は、州内のインフラを国際水準に改善するよう大きな関心を払っており、これに伴い日本からの投資を一層促進していきたい旨発言。

今月の注目点: 枝野経済産業大臣及び前田国土交通大臣のインド訪問

昨年末の野田総理大臣のインド訪問ではデリー・ムンバイ間産業大動脈構想やインド南部におけるインフラ開発等二国間の経済関係分野で大きな進展があったが、年明けの枝野・前田両大臣のインド訪問は日本政府のインドとの経済外交をさらに推し進めるものとなった。

枝野経産大臣はジャヤラリータ・タミルナードゥ(TN)州首相に日本企業の投資促進への協力を要請した他、同大臣及びジャヤラリータ州首相立会のもとTN州投資誘致極とアセンダス社(シンガポール系政府企業)、みずほコーポレート銀行及び日揮の3社コンソーシアムとの覚書への署名、JETROのビジネス・サポート・センター・チェンナイの開所式への出席等を行った。

前田国交大臣は、トリベディ鉄道大臣との会談で高速鉄道分野における日インド間の協力を加速化するためにハイレベルの協議体を設置することで一致した他、ジョシ道路交通大臣との会談では日本の高速道路に関する技術移転や事業参画についてトップセールスを実施、また、ヴァサン海運大臣とはシップリサイクル・プロジェクトやインド南部におけるPPPを活用した港湾整備等について議論を行った。

## 4. イベント紹介 Japan-India Events

### ＝ 最近のイベント ＝

#### 日印国交樹立60周年記念事業 オープニング・セレモニー

皆様ご承知のとおり、2012年は1952年(昭和27年)に日本とインドの間で平和条約が調印され、国交が樹立されてから60周年という記念すべき年です。これを受けて、去る1月16日(月)夕、在京インド大使館において、60周年記念事業の幕開けに相応しい、オープニング・セレモニーが開かれました。

ブラサド駐日大使、森喜朗日印協会会長、別所浩郎外務省外務審議官、平林博日印協会理事長など多数が出席しました。インドの伝統に従ってオイルランプ点火式が行なわれ(『月刊インド』1月号の表紙ご参照)、続いて、ブラサド大使並びに森会長の挨拶の後、同大使館講堂でパネル・ディスカッションが開催されました。満員の参会者が熱心に討論に聞き入り、日本とインドの絆の強さを垣間見た次第です。

また、翌17日から一般公開される過去100余年に亘る貴重な『日印交流の歴史写真展』の代表的な写真も併せてロビーで展示され、大変好評でした。



< パネル・ディスカッション

ロビーでの写真展示>



#### 日印交流の歴史写真展 復興する日本と躍動するインド～新たな発見、新たな交流

九段にある在京インド大使館で1月17日から20日まで開催した『日印交流の歴史写真展』は、多くの方にご来場頂き、好評のうちに終了致しました。

なかでも India International School in Japan(IISJ)の多くの生徒達が、先生に引率されて見に来ていた姿が印象的でした。先生方の丁寧な説明に耳を傾けながら熱心に写真に見入る生徒達によって、将来の日印関係がより深められる事を確信しました。

見学したIISJの生徒のうち2名の方(Bharath Srinivasさんと



< 展覧するIISJの生徒達>

Muna Dhakal さん)からの感想を頂きました。年長の Muna Dhakal さんの感想をここに掲載し、写真展の報告に代えさせていただきます。



### My experience at the photo gallery

On January 25 2012 we went to the Embassy of India to see a Photo Exhibition. We thought it would be really boring. But, after seeing the photographs our views totally changed. Seeing the photographs of 1940's, we were really shocked. I didn't know much about India. So it was a great chance for me to discover the facts about India. There were many photographs showing India- Japan relationship. We felt really nice seeing those pictures. It increased our knowledge about India-Japan's 60 years relationship. A guide explained about each and every photo and told us the history behind them. There were divesting pictures of March 11 2011. There were pictures of the Indian rescue team. Studying in an Indian school and seeing all those pictures made me proud. We were duly contended to see the diplomatic relations brooding between the two countries.

I enjoyed the trip a lot.

Muna Dhakal, Grade 9. (日本の中学3年生に相当)

### 第63回インド共和国記念日 Republic Day



<氷の彫刻のインド門>

1950年1月26日、インド共和国憲法が施行されました。以来、インドでは1月26日を Republic Day として、毎年盛大に記念行事を行っています。

日本においても、1月26日にホテルオークラにて、例年通りインド大使館主催のインド共和国記念日の祝賀パーティーが開催されました。内外の関係者が多数招待され、当協会からは平林理事長、原常務理事他が参加し、祝意を伝えました。また、関係者と懇談し、日印協会の活動をアピールしてきました。

### 「『河童が覗いたインド』を語る」



<上 妹尾河童さん  
下 熱心な聴衆>

福岡アジア美術館で開催中の『魅せられて、インド。』では、会期中に様々なイベントが開催されています。

2月11日(土)には、本展に出品もされている妹尾河童さんによる講演「『河童が覗いたインド』を語る」が開催されました。改めて読み直すと、初版が1985年という事もあり、まだまだ“パイサ”が現役で使われており、1ルピーも25円で換算されていて、時代が変わったことを感じさせますが、同時に今も変わらぬインドが描かれています。

河童さんの名前の由来から始まった講演は、『河童が覗いたインド』を著者自身が語り、インドの旅を追体験しているかのようでした。そもそも、何故“覗いた”なのか、「漠然と見ていてはわからない、覗いたからこそ見えてくるものがある」、というのがその理由です。確かに、本文中の全てのイラストは、漠然と見ただけではとても描かけないものばかりです。タージ・マハルを語る時にルードヴィヒ 世をも語る博学さ、車内の寸法をはかるのに周囲の人達を巻き込んで手伝わせてしまう溢れんばかりの好奇心、アジャンタ石窟を発見するきっかけになったトラの逃走経路まで描いてしまう想像力、講演を聞いていると、徹底的にインドを覗いた河童さんの思いが伝わってきました。

『魅せられて、インド。』には、河童さんの生原稿が展示され、描かれたイラストの本物が展示されています。「まだ展示をご覧になってない方は、是非見て行って下さいね！これだけのコレクションを見る事はできませんよ!!」と河童さんも推薦されていました。

3月11日(日)まで開催される『魅せられて、インド。』では、あらゆる分野のインドやここでしか見る事の出来ないものからコレクターの熱気までを五感で感じられます。どうぞ皆様も足をお運び下さい。

( P.18 に図録の紹介記事もありますので、ご覧下さい。 協力：福岡アジア美術館)

## ＝ 今後のイベント ＝

### タゴール生誕 150 年記念会

『タゴールから日本と世界へのメッセージ』～タゴールの作品(詩・文学・絵画・音楽・舞踊等)を通じて～  
本年 2012 年は日印国交 60 周年記念事業年にあたり、タゴール生誕 150 年記念会および印日文化センターは、タゴールが日本と世界に与えた影響についてシンポジウムを開催いたします。インド西ベンガル州コルカタのシャンティニケタンにあるタゴール国際大学より専門家をお招きして、タゴールの作品(詩・文学・絵画・音楽・舞踊等)を通して理解を深めるために、日本の専門家とディスカッションを行います。

日 時: 2012 年 3 月 19 日(月) 13:00～17:00

場 所: 国際文化会館 岩崎小彌太記念ホール 東京都港区六本木 5-11-16 03-3470-4611

申込方法: 参加申込用紙(ご案内用紙裏面)に必要事項をご記入のうえメール又は FAX にて送付

参加費: 1,000 円 (日印協会会員・国際文化会館会員の方は、500 円)

主催者: タゴール生誕 150 年記念会 印日文化センター(予定)

連絡先: E-mail tagore150japan@gmail.com / FAX 045-788-2816

### タゴールと日本女子大学

世界平和を希求するインドの詩聖(アジア初のノーベル文学賞受賞者)ラビンドラナート・タゴール(1861-1941)は、1916 年に初来日の際、日本女子大学創設者・成瀬仁蔵の招きで成瀬講堂において『ギータンジャリ』の朗読と講演をされ、その後も(1924 年、1929 年にも来校)軽井沢の三泉寮で、学生たちに心をこめて瞑想の指導をしました。タゴールと成瀬仁蔵や高良とみとの交流を通じ、女子教育に心をくだいたタゴールと日本女子大学との関係を多面的に学びます。

日 時: 2012 年 4 月 21 日(土) 13:30～17:00

場 所: 日本女子大学目白キャンパス成瀬講堂 東京都文京区目白台 2-8-1 03-3943-3131

参加費: 無料

申込方法: 参加申込用紙(ご案内用紙裏面)に必要事項をご記入のうえメール又は FAX にて送付

主催者: タゴール生誕 150 年記念会 「タゴールと日本女子大学」実行委員会

連絡先: E-mail tagore150japan@gmail.com / FAX 045-788-2816

### ニューデリーで写真展及びパネル・ディスカッションを開催

日印国交樹立 60 周年を記念して日印協会はニューデリーにおいて、在デリー日本側実行委員会の後援のもと、インド・インターナショナル・センター(IIC)と国際交流基金ニューデリー日本文化センターとの共催で記念事業を行います。特に IIC は本年設立 50 周年記念の節目の年でもあり、諸行事が計画されている中、主要な目玉催事として計画、準備戴いています。IIC(インド国際会館)は日本の六本木にある国際文化会館を参考にして設立され、その定礎式には今上天皇陛下と皇后陛下(当時は皇太子・同妃殿下)が参加された非常に日本とは縁の深い会館です。当会館の別館(ANNEXE)において下記の要領で開催されます。同時期にニューデリーにおいてになる方や近郊にお知りあいのある方にお知らせ戴ければ幸いです。

#### ■ 『日印交流の歴史写真展』

60 周年記念事業のテーマである

「復興する日本と躍動するインド～新たな発見、新たな交流」

"Resurgent Japan & Vibrant India: New Discoveries, New Exchanges"

をアピールする写真を厳選して展示致します。そして両国交流の歴史を振り返ることが更なる関係発展に活力を与えると確信し、協会が創設された 1903 年(明治 36 年)以降の歴史的節目を記録した写真を中心に写真展を構成いたしました。過去一世紀にわたり撮影された交流の歴史を伝える写真だけではなく、近年開催されたイベントの様子を伝える写真、昨年インド災害支援隊の活動などもご覧いただけます。

期 間: 2012 年 3 月 14 日(水)～3 月 20 日(火) 10:00～18:00

この写真展開催に先立ち、開会式が13日(火)5時から挙行されます。S.M.krishna インド外務大臣(予定)、齋木在インド日本国大使などをお迎えし、主催者側は森喜朗日印協会会長、S.J.Sorabjee IIC 会長、などが出席し、点火式が行われます。

#### ■ パネル・ディスカッション

3月14日(水)10時～1時の予定で、同館(IIC)Lecture Room 2 に於いてパネル・ディスカッションが開催されます。「日印関係、回顧と将来への展望」と題して2セッションが行われます。パネリスト及びモデレーターとして下記の方々に参加されます。

##### ▶ 第1セッション

パネリスト; Mr. Arjun Asrani (元駐日インド大使)  
長崎 暢子 (龍谷大学 現代インド研究センター長)  
モデレーター; Mr. Eric Gonsalves (元インド外務次官、元駐日インド大使)

##### ▶ 第2セッション

パネリスト; 榎 泰邦 (元駐印日本大使)  
Professor K.V. Kesavan  
(ジャワハルラール・ネルー大学名誉教授、インドオブザーバー・リサーチ財団特別フェロー)  
モデレーター; 平林 博 (日印協会理事長、元駐印日本大使)

#### ■ 『日印交流の歴史写真展』、パネル・ディスカッション、共に会場等は下記の通りです。

会 場: India International Centre, Annexe  
40 Max Mueller Marg. New Delhi 110003 Tel 11-2461-9431  
入場料: 無料 Free Admission (一般観覧者 歓迎)  
主 催: 公益財団法人日印協会 IIC 国際交流基金  
後 援: 日印国交樹立60周年事業在デリー日本側実行委員会、  
問合せ先: IIC Programme Division Tel 11-2461-9431



< 日印平和条約の締結 1952年  
(在京インド大使館提供)>



<会場となる IIC Annexe >

## 日本における日印国交樹立 60 周年記念事業

前号に引き続き、3月以降のイベント紹介致します。



March-April 2012		
9	Cultural troupe from Nrityagram (ICCR) coinciding with Sakura festival (The troupes may travel to Kyoto/Nara, Yokohama, Niigata, etc) Odissi style-Buddhist theme	April 2012
10	Indian Cuisine Festival - Nagaoka Grand Hotel-Niigata	19 March 2012
11	Indian Food Festival in association with 25-30 Indian restaurants	23 - 30 March 2012
12	Bharatanatyam performance by Studio Prachi in Osaka organized in partnership with Ms. Yoko Matsushita	20 March 2012
13	A literary festival conceptualized and moderated by Shri Vikas Swarup, CG, Osaka-Kobe	April 2012
14	Release of the movie "Robot" with Japanese subtitles in coordination with a company Media-Gate at IIC Auditorium -(preparations are under discussion with the organizers)	
15	Academic Semina with Indian and Japanese scholars on the topic, "India-Japan Passage to the Future" to coincide with the inaugural ceremony of the 60th anniversary of the establishment of diplomatic relations-supported by Indian Council for World Affairs(ICWA), New Delhi	28 April 2012
16	India-Japan Friendship in Maizuru, Kyoto	April/May/June 2012
May 2012		
17	A Major business event to be coordinated and developed in collaboration with CII, Keidanren together with India Evening	2nd half of May 2012
18	Business Event in Kansai region in partnership with Kankeiren and ICCJ, Osaka	
19	Publication of a comic book "India Japan 60 Secrets" by Toshio Printing Corporation, distribution in schools and public libraries	May 2012
June 2012		
20	Visit of a naval ship (along with a naval band) Joint performances with Navy Band of Japan	June 2012
21	Seminar on Japan-India Security Cooperation by Japan Institute for National Fundamentals (JINF) and Vivekananda International Foundation (VIF)	2 - 3 June 2012
22	Kala Mahotsav-an Indo-Japanese fusion organized in cooperation with local Japanese artistes in Kansai region, Osaka	9 June 2012
23	India Show to be organized by EEPC, coinciding with M-Tech Exhibition at Tokyo Big Sight Centre	20-22 June 2012
July 2012		
24	Regional celebrations at Okinawa, Toyama and other prefectures showing interest	July 2012
25	Proposal to organize a Bollywood Film Festival with 19 blockbuster Hindi films in cooperation with Nikkei	July 2012
26	Proposal to organize a Photo Exhibition of the famous Indian photographer Raghu Rai by Nikkei	July 2012
27	Proposal to produce an animation film on Cricket by Kodansha Co.Ltd.	
August 2012		
28	Panel Discussion on "One Year of CEPA-Where Are We?"	1 August 2012
29	Odissi dance performance by Rahul Acharya at Osaka	4 August 2012
30	Indian Film Festival-a retrospective of the films of veteran Tamil actor Rajnikanth	15-21 August 2012
31	Odissi dance performance and workshop by Rahul Acharya in Niigata	25-26 August
September 2012		
32	Odissi dance performance by Rahul Acharya in Tokyo	6 September 2012
33	Workshop by Rahul Acharya on Odissi dance (Venue: TBC)	8-14 September 2012
34	Odissi dance performance and workshop in Fukuoka	15-17 September 2012
35	Namaste India Festival, Tokyo	22-23 September 2012
36	Kairali/Martial Arts (ICCR) in various cities in Japan	September 2012
37	Seminar/Symposium on India-Japan Relations by the Japan Forum on International Relations (JFIR) in cooperation with the Observer Research Foundation (ORF)	September 2012
October 2012		
38	Concurrent events on the sidelines of PM's visit for the Annual Summit (i) Opening Ceremony of the Memorial Hall of Dr. Nakamura at Matsue in Shimane Prefecture on October 10, 2012 (ii) Rajasthani folk dancers/Manipuri (Pung cholam or Dhol cholam (ICCR)	October 2012
39	Indian Scientists Association Japan (ISAJ) symposium	7-8 October 2012
40	India Mela 2012-Annual Festival at Meriken Park, Kobe	6-8 October 2012
November 2012		
41	Painting Exhibition- "One Japanese Painter's India-Masami Yamada Exhibitio	November 2012
42	Photo exhibition "Japan Four Seasons" by Shri NK Singh, Member of Parliament (Rajya Sabha) at India Cultural Centre, Tokyo. The exhibition will move to Kyoto subsequently.	November 2012
43	Seminar/Symposium on India-Japan Relations-post Annual Summit by The Japan Institute of International Affairs (JIIA) in cooperation with the Indian Council for World Affairs (ICWA)	November 2012
44	Indian Food Festival in Swiss Hotel Nankai Osaka	Second half of 2012

(在京インド大使館の資料による)

インドにおける記念事業につきましては、P.4に掲載しておりますが、在インド日本大使館のホームページでもご確認頂けます。どうぞご参照下さい。

URL [http://www.in.emb-japan.go.jp/2012celebrations/celebrations\\_2012.html](http://www.in.emb-japan.go.jp/2012celebrations/celebrations_2012.html)

## 5. 新刊書紹介 Books Review

### § 『シルク大国インドに継承された日本の養蚕の技 技術者の絆が結んだ高品質な生糸づくりの夢』



著者：山田 浩司 (やまだ こうじ)

発行：ダイヤモンド社 地球選書 004

定価：1,500 円+税 ISBN 978-4-478-04221-2 C0361

南インドにおいて、1990年代初めから16年に亘って、JICAによる養蚕の技術協力プロジェクトが行われた。本書はその活動記録です。「優良なマユとは、どのようなマユか」を正しく理解する事から始まるプロジェクトは、決して順調とは言えず、技術指導・移転は異文化のせめぎ合いもありました。しかし、日本の高度な技術協力と南インド独自の「マユ市場」の存在とも相俟って、プロジェクトはその役割を果たしていきました。何であれ、そこに根を下ろすにはどうすれば良いか、本書にはその答えが詰まっています。

### § 『ラーマヤナ物語』



著者：ヴァールミーキ

訳者：前田 行貴(まえだ ぎょうき)

発行：青娥書房

定価：3,800 円+税 ISBN 978-47906-0298-9 C0098

古代インドの長編叙事詩『ラーマヤナ』が、在印45年の前田氏により新たに「語り訳」された本書は、分かり易く読み易くなっています。細かい注釈に加えて、振り仮名もふられ、中学生でも容易に楽しめそうです。かつて挫折した方、本書で再挑戦されては如何でしょうか。

### § 『魅せられて、インド。 日本のアーティスト/コレクターの眼』 展覧会図録



編集：五十嵐 里奈・堀川 理沙

発行：福岡アジア美術館

定価：1,800 円(税込)

「イベント紹介」欄のP.14でもご紹介致しました、福岡アジア美術館で3月11日(日)まで開催される『魅せられて、インド。』の図録です。図録を開くと、作品やコレクションを目にした時の感動が甦ります。インドならではの構成ですが、例えば、横山大観と横尾忠則を1冊の本で楽しめる、そこに加えられるアクセントはグレゴリ青山、となれば図録以上の魅力を感じませんか？ インド好きにとって、この図録は“お宝”になりそうです。

## 6. 掲示板 Notice

<次回の『月刊インド』の発送日>

今号は2-3月合併号のため、次回発送は2012年4月13日(金)を予定しております。催事チラシの封入をお考えの方は、日程をご確認のうえ事務局までご連絡下さい。チラシを封入する際には、当該催事の協会会員に対する割引等特典の配慮をお願いしております。チラシ印刷の前にご一考下さい。

<表紙の写真について>

今月号の表紙は、大混雑する雪まつり会場で、開会式当日に鎌野代志美さんがベスト・ショットを狙って撮影して下さった力作です。他にも、熱演するポリウッド・ダンサーの写真なども送って下さいました。鎌野さんは元日本航空ニューデリー支店長をされていた方で、2011年から生まれ故郷の札幌で「エルム行政書士事務所」を開設し、活躍されています。この場を借りて御礼申し上げます。



<編集後記>

最近、とみにインドが脚光を浴びていると感じます。お笑い系の番組でも頻繁に取り上げられているので、ご覧になっている方も多いのではないのでしょうか。おかげさまで当協会もマスコミ関係から脚光を浴びているようで、「インドの についてお伺いしたいのですが」と、お問合せの電話を頂きます。一体どういう切り口なんだろう? という事もあります。番組を見ると、現地にロケにも行っているし、「あるある、こんな事!」と同感できる内容に上手くまとまっています。更に、国交樹立60周年に関連したお問合せもあり、硬軟両面のインドが取り上げられているので、協会としては嬉しい限りです。

逆に、お問合せによって、「そんな事があったのですか」と勉強させて頂く事もあったり、資料不足でわからないままになってしまっている事もあります。

良いお話があれば、『月刊インド』に載せたいと思っています。また、皆様の中でも良いモチーフをお持ちの方、『月刊インド』に投稿してみませんか? お待ちしております。



日印親善のために会員の輪を広げましょう

法人会員・個人会員の入会をお待ちします



1903年、大隈重信、澁澤榮一らによって創設された日印協会は、これまで日印の相互理解と両国の親善増進のために、日々地道な努力を続けてまいりました。ここ数年来の日印の良好な関係がより一層深まるためにも、会員の獲得は重要な課題であると考えています。インドに興味のあるお知り合いの方がいらっしゃいましたら、是非日印協会をアピールして下さい。

ご希望により、当協会の活動に関する諸資料をお送りいたします。

日印協会の活動に賛同して頂ける多くの法人会員・個人会員のご入会をお待ちしております。

年会費：個人	6,000 円/口	入会金：個人	2,000 円
学生	3,000 円/口	学生	1,000 円
一般法人会員	100,000 円/口	法人	5,000 円
特別法人会員	150,000 円/口	(一般法人、特別法人会員共に)	



本誌に掲載致します投稿等は、執筆者のご見解・ご意見であり、当協会の見解を反映するものではありませんので、念のため申し添えます。

月刊インド Vol.109 No.2 (2012年2月17日発行) 発行者 平林 博 編集者 青山 鑲一  
発行所 公益財団法人 日印協会  
〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町2-1-14 スズコービル2階  
Tel: 03-5640-7604 Fax: 03-5640-1576 E-mail: partner@japan-india.com  
ホームページ: <http://www.japan-india.com/>

